

5月11日(日)開催!!

第64回 寄居北條まつり

町を代表する「寄居北條まつり」は、戦国時代の豊臣軍と北条軍の合戦を再現したもので、毎年5月中旬に開催されています。祭りの当日は、甲冑を着た武者が市街地をパレードした後、玉淀河原で攻防戦や一騎打ちを繰り広げます。その様子は、戦国時代さながらの迫力です。鉢形城三鱗会は、寄居北條まつりを運営する団体の一つであり、主要な団体として長年携わってきました。そこで今回は、はちかたじょうまつりこかい 鉢形城三鱗会の祭事企画部長である北原定行さんにお話を伺ってみました。



■鉢形城の家臣団が結成 鉢形城三鱗会

「お祭りは楽しくなければなりません」そう話すのは、鉢形城三鱗会の祭事企画部長の北原さん。群馬県高崎市出身で、父の影響から、およそ35年以上前に鉢形城三鱗会の会員として活動しはじめ、長年にわたり、祭事企画部長として会を取りまとめています。

「鉢形城三鱗会は、もともと、鉢形城にいわれのある家臣団の方たちが発足した会であり、当初は鉢形城の家臣の供養を目的に『供養祭』が行われました。その後、時代とともに『鉢形城まつり』や『北條まつり』と名称が変わり、現在の『寄居北條まつり』になりました」

鉢形城は、戦国時代に関東一帯を広く支配した北条氏が治めた城で、鉢形城三鱗会の名前の由来は、その北条氏の家紋「三つ鱗」から名付けられたことです。インタビューを行った場所は、鉢形城内にある鉢形城三鱗会の事務所。辺りを見回すと、大將鎧や足輕鎧など、細工が施された甲冑がずらりと並び、この甲冑にほれ込んだ方が、注文を依頼してくるほど精巧に仕上げられています。ほかに、のぼり旗や刀、槍、衣装、ひいては大砲までも手作りというのは驚きです。「材料一つにしてもほとんどが手作りです。北条軍は黒い甲冑であると言い伝えられているので、なるべく当時の

鎧に似たものを作るよう心がけています。また、長時間着られるよう軽量化にも取り組み、攻防戦でも割れないような甲冑を作るといったのもこだわりの一つです」と語ります。甲冑や衣装などが破損した場合には、その都度修復を行い、新たに製作もします。「甲冑一つ当たりの製作時間は約20日かかりますが、それがやりがいにつながっています」と語ります。

寄居北條まつりにおける鉢形城三鱗会は、主に大將鎧や足輕鎧、子ども忍者の衣装など約450着以上を管理、修理、製作、貸し出しを行うほか、河原の舞台ステージの設営や河原の整地、町内にのぼり旗や看板の設置を行うなど、幅広く活動しています。

「細かい作業や重労働もありますが、それぞれの会員の得意不得意を見極め、役割分担を行っています。大変なことはありません。楽しいことだらけです」

鉢形城三鱗会には、市街地支部、六供区・風布支部、金尾支部、立原区・保田原支部、折原支部、東京支部など、その地区ごとに支部が存在します。昔と比べると支部数や会員数は少なくなりましたが、現在は約80人の会員が在籍し、祭りの開催が近くなる休日には約40人以上が集まり、活動しているとのこと。また、会を取りまとめるうえで大事なことを伺うと「会の中では、コミュニケーションを大事にしています。年々、会員の平均年齢も上がりつつありますが、和気あいあいと活動しています」と語ります。今後のことを考え、次期後継者の話もしているとのこと。

「50代、60代の方が大勢活躍しています。興味のある方は大歓迎です」



▲1970年代の写真